

通用へボン式の概観

Review of folk Hepburn romanisation systems

(2009年5月25日版)

辻野匠 (Taqumi TuZino; *personal family*)

2009-02-15 起筆. PDF が正式. HTML のために代書法を使ふも乱れてゐる場合がある.

目次

I. はじめに	2
II. 本稿で扱ふ記号	4
III. へボン式ローマ字の虚構	5
IV. 通用へボン式ローマ字表	6
V. 考察	7
V. 1 四ツ假名	8
V. 2 長音の表記	9
V. 2.1 長音を翻字で表記する方法	10
V. 2.2 長音をマクロンやハット以外で表記する方法	11
V. 2.3 補足. なぜ長音が多いのか	12
V. 2.4 補足. 長音短音の対立は絶対か	12
V. 3 撥音「ん」	13
V. 3.1 直後の音による「ン」の多様化	13
V. 3.2 後続の母音との結合でナ行になる問題	14
V. 4 「ゐ」「ゑ」	14
V. 5 拗音. 特に「ジャ」行	15
V. 6 分かち書き・分綴の困難さ	16
VI. おわりに	17
VII. 文献	17
VIII代書法	18

I. はじめに

日本語のローマ字表記は国際的にはISO3602 といふ日本式が正式なもので、国内的には訓令式(吉田内閣)が正式のものである。これはISO3602の日本式について厳密翻字をしないものである。それらは日本語内に潜在する音の法則に沿ったもので、それなりに合理的であるが、そのような正規のものとは別に、世間一般では圧倒的にヘボン式系統が多数派である。「系統」と書いたのはそれが単一のものではなく派生形の集合体からなるためである。つまり、ヘボン式と標榜してゐる規格にもいろいろあって、それぞれに微妙に異なつてゐる。また、規格とは別個に人々が別の方法を編み出して表記してゐるものがある(たとへばオーに oh, ユーに uh とするもの)。が、どの規格・どの私案であっても、チシツフジの綴り方は同じ chi, shi, tsu, fu, ji である。これをもって世間ではヘボン式と云つてゐることが多い。ただ、前述のやうに厳密にいへば、規格としてのヘボン式にもいろいろある。端的な違ひは、長音の表記と撥音「ん」の表記をどうするかである。

\ 例	長音		撥音	分節	
	大通り	踊り	アンパンマン	原因	下人
和英語林集成 〔第三版〕	マクロン Ōdōri		唇音は m それ以外は n Ampamman	「-」 Gen-in	Ge-nin
ローマ字ひろめ会 「標準式」	ハット Ôdôri		唇音は m それ以外は n Ampamman	「'」 Gen'in	Genin
国交省(舊鐵道省) 〔駅名用〕	マクロン Ōdōri		唇音は m それ以外は n Ampamman	「-」 Gen-in	Genin
国交省(旧建設省) 〔道路標識用〕	無視 Odori		常に n Anpanman	「-」 Gen-in	Genin
外務省旅券用	無視 Odori		唇音は m それ以外は n Ampamman	無視 Genin	Genin
ANSI 〔進駐軍による〕	マクロン Ōdōri		常に n Anpanman	「'」 Gen'in	Genin

- ・和英語林集成第三版はヘボン氏(米国平文先生)謹製の和英語林集成(和英辞書)第三版に用ゐられたローマ字。
- ・ローマ字ひろめ会「標準式」の長音記号が和英語林集成第三版と違ふのはタイプライターにあるハットを採用したためか。
- ・駅名用は厳密にこの規定に従ふものはJR(旧国鉄)のみで、他の事業者は任意である¹。

¹たとへば蒸気機関車を現在も運行してゐることで有名な真岡鐵道(Mōka Railway 「もおか」をモーカとしてゐる)は益子を Masiko, 寺内を Terauti と日本式で表記してゐる。他の鐵道事業者では、ある時はヘボン式・ある時

・外務省旅券用 オ段に限って本人の申告により oh といふ綴を認めてゐる。ただし、ウ段は裕司などの例が多くあるにも関はず、認められてゐない。

・修正ヘボン式。本稿では修正ヘボン式といふ名称は使はなかつた。修正ヘボン式といふ名称は安易に使はれてゐるが、これがなにを指してゐるのか曖昧である。ヘボン氏の和英語林集成第一版に対して、第三版を修正ヘボン式といふこともあれば、第三版に対して、後のローマ字ひろめ会(ヘボン氏も会員であつた)の「標準式」を修正ヘボン式と呼ぶこともある。また、それらに対して、鐵道省駅名用のローマ字表記を修正ヘボン式と称することもあるし、進駐軍の定義したローマ字と修正ヘボン式と呼ぶこともある。また、道路標識用や旅券用のヘボン式を修正ヘボンと称することもある。たとへば、「パスポートは修正ヘボン式で書くこととする」といふやうな規定があつた場合の「修正ヘボン式」と、「道路標識は修正ヘボン式で表記する」といふやうな規定があつた場合の「修正ヘボン式」とは異なる。

・真正ヘボン式といふ言葉がある。この言葉も明確ではなく、様々な使はれ方をしているが、修正ヘボン式ほど曖昧ではない。厳密には和英語林集成第三版と指すべきであるが、実際の多くの用例では長音表記をし、唇音かどうかで撥音を書きわけると指すことが多い(本稿でもそれを指す)。中でも鐵道省式を指すことが多い。長音表記はハットではなくマクロンが言語学的には一般的であり、ハット(山形)は訓令式の表記と誤解されたため忌避されてゐるのかもしれないが推測の域を出ない。和英語林集成第三版式は語の構成を明確にするために過剰に分節されてゐるため使ひにくいやうだ。

このやうないろいろなヘボン式に対して、世間で使はれてゐるヘボン風ローマ字綴りを通用ヘボン式といふことにする。通用ヘボン式は当然、厳密な規格ではなく、なんとなく行はれてゐるヘボン風の綴り方の総称、集合名詞である。通用ヘボン式が用ゐられる原因のひとつは規格に対する無知・無理解である。このやうに複雑化したローマ字綴の色々をいちいち把握することは特殊な場合を除き、あり得ない。そこでそれぞれが自分なりの基準でローマ字を表記する。これは規格に対する無知・無理解ではあるが、規格とは別に、ユーザーが自身の視点にたつてローマ字綴りを生成してゐると見ることもできる、そしてそのローマ字が通用するとふことは、そのローマ字表記には自然発生的な組織化の結果と再評価することもできる。

また、非ローマ字圏は必然的にローマ字とは違ふ世界観・文字観・表記観で世界・言葉を組織化してゐるために、ローマ字で言葉を再構成する際には常に揺らぎや混乱が生じる。これは元来、非ローマ字圏の言語の問題とされてきたが、実際は文字側(ローマ字)のもつ問題である。言語学では文字は言語そのものと切離して捉へられることが多いが、言語にとって文字は不可分である。

通用ヘボン式が用ゐられる原因の第二は、規格の不備である。規格の不備を人々が独自のアイディアで補完するため、別の「規格」=通用ヘボン式が生まれてしまふ。実際、これらのローマ字規格には問題がある。たとへば「づ」といふ文字をどう表現していいかわからないといふことがある。上記の規格では「づ」は発音としては「ズ」と同じだから、「ズ」と同じ zu と表記せよと規定してゐる。しかし、話者の心情としては、「づ」は文字としては「ず」と違ふのだから、zu

は日本式といった混用であつたり、ヘボン式といつても時々で異なるヘボン式(m/nや長音、撥音、分綴の表記)を使つてゐて社内でも混乱してゐることもある。

は嫌だと思ふこともある。また、長音については、上の規格のあるものはマクロンやハットで表現してゐるが、それらはキーボードで打てない(厳密には、打ちにくい)ので困るといふ苦情がある。かといって、旅券用ローマ字綴のやうに無視してほしくない人もゐるだらう。たとへば、孝三大先生といふ方がいらっしやっても長音表記を無視してしまつては、Kozo さん、つまり小僧さんになつてしまふ。仕方がないので、それぞれが自分なりのローマ字を「発明」する(たとへば長音ユーを yuh とするもの)。

さういふ自然発生的な表記が公的性を獲得して(他の人が見ても理解できて)、ある程度の体系を構築した時、それは通用表記となる。ローマ字の場合、わざわざ日本式を使ふものは、ローマ字に対する規格に敏感なものであるから通用表記は起きにくい。その上、世間ではヘボン風の表記が多数派であるから、通用はもつぱらヘボン式に対して成立する。これをここでは通用ヘボン式といふ。

ローマ字表記の問題点を解決しようとした試みもある。ヘボン式の拡張案としては佐藤正彦氏(ヘボン式の拡張案)や上西俊雄氏(拡張ヘボン式)があるが、ここで扱ふのは、そのやうに「ちゃんとした」ものではない。英語タイトルに folk Hepburn System とあるやうに、表記や言語学的検討を踏まへたものではなくて、ここでは、人々が自然発生的に書くローマ字表記を扱ふ。

なほ、表記や文法には記述志向と規範志向といふ二種類の方向性があり、両者はまったく別物である。記述志向とは、言語がどのやうに運用されてゐるのか知ることが目的で、記述文法とは記載の学である。規範志向とは、言語はどう運用しなければいけないか規範を整備することが目的で、規範文法とは規範である。たとへば、日本語表記を観察して、日本語では漢語以外の外来語はカタカナで表記してゐる、といふ知見は記述假名遣であり、人の文章を添削して「ふらんす」と外来語なのに平仮名で表記してあるのを間違ひと指摘するのは規範假名遣である。

本稿は最初にローマ字表記の実態から概観し、それを踏まへた上で、若干、批評する。前者は実態把握であるから、記述志向の方法論であり、後者は規範志向といへる。このやうなアプローチをとる理由は、これまでのローマ字論では、運用の実態を踏まへず、それぞれの立場を単純に主張するのみの論が多かつたため、ある意味、実態から遊離した空論になりがちであつたこと反省からである。運用の実態を踏まへた上で、批評することが重要である。批評といつても、自然発生的に「さうなつたもの」に一々、規格から見て、あるいは規範言語的に間違つてゐると指摘することではない。運用面から見て、その表記は有用かどうかである。

II. 本稿で扱ふ記号

本稿で扱ふ記号には IPA(International Phonetic Alphabet: 国際音声記号) など印刷や計算機で取り扱ふのに特別なソフトウェアを必要になる。そこで、ここでは巻末に示す代書法で表記することにする。

なほ、IPA では [j] はジャではなくヤ行の頭子音である。また、[u] は円唇後舌狭母音で英語仏語の u である。標準的な日本語のウはこれとは若干異なり平唇の後舌狭母音であるが、完全に平唇でもなく平唇と円唇の間の広い範囲を指す。関西では特に円唇が強い。平唇と円唇を区別する韓国人が日本語とハングルで表記すると、ウ段を一(平唇)にするかㅜ(円唇)にするか表記が揺れることがある。この問題の本質は日本語では平唇と円唇を区別しないことにある。ここでは円唇も平唇も区別せず、u で示す。ツやチのやうな破擦音は IPA では合字で示すか、tie-bar で二文

字を連結しなければいけない (t_s). 代書法では tie-bar で連結したが、しばしば省略されることが多い。有声両唇摩擦音 $[\beta]$ は日本語では独立の音韻をなさず、語中のバ行の異音である。

III. ヘボン式ローマ字の虚構

ヘボン式(風)ローマ字は英語風であるとか、発音を正しく表記してあるといふ誤解があるが、それは虚構である²。たとへば、子音が英語風なのに母音は英語風ではない(後述)。それ以外にも、ローマ字でギのつもりで gi と書いても、英語では「ジ(より正確には)ヂ」と読まれたりする。英語(と他の多くの言語)では f はフの子音ではなく、唇歯音 $[f]$ である。フの子音は両唇音 $[\Phi]$ で、日本語の「フィー」といっても英語では fee と聞こえない(whee?). $[f]$ を発音するためには、下唇を上歯に当てる必要がある。シの子音は英語の sh $[ʃ]$ ではなく、 $[s]$ で、最近では $[s]$ (sea の s) と発音する人がゐる(「オイスィー」)し、中には $[\theta]$ (カナでは表記不能)の人さへゐる。ji は「ジ」に当てられるが、英語の j は $[dʒ]$ であるから「ジ」の子音といふよりは「ヂ」の子音のほうが適当である。しかし、虚構は虚構で構はない。通用ヘボン式を使っている人の多くは、ヘボン式は英語風であるとか発音を正しく表記してあると信じてゐるかもしれないが、運用にあたって重要なのは、そのやうな条件を正しく満してゐるかではない。人々が自分が思っていることを十全に表現できるかである。したがって本稿では、かかる虚構は一切無視する(一切さういふものとして扱ふ)。

²ヘボン式の賛同者の中でも当初は必ずしも英語風を指向してゐたわけではないと理解できるフシがある。明治大正とヘボン式を広めてゐた時に羅馬字会といふものがある。そこが‘修正ヘボン式’(修正ヘボン式はいろんな団体は自己のそれに命名してゐて一義的でないので、ここでは羅馬字会ヘボン式と称す)というものを定義してゐるが、そこでのアルファベットの読み方は A ア, B ベ, C チ, D デ, E エ, F フ, G ゲ... Q ク, R ラ... U ウ... Z ゼとなり、かなり英語とは異なる。これはもつともな話で、もし英語風にエイビスイディ/エービーシーディー(ヂー)としたら、日本語のローマ字表記のほうが呼めなくなる。羅馬字会ヘボン式は日本語をローマ字表記するためにあるのだから日本語が呼めないやうなアルファベットの呼び方は適当ではない、という判断なのだらう。なお、念のため付記すると、これは単純なイタリア語風ではなく、独自の呼び方である。伊語なら B はビ, D はディだがそれは採用されてゐない。R ラも違つてゐる。もちろんドイツ語風でもフランス語風でもない。

IV. 通用へボン式ローマ字表

太字で示したのは今回新たに提案する綴方である。

√ 直音 (開口呼)

行 \ 段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ア行	あ a	い i	う u	え e	お o
カ行	か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
サ行	さ sa	し shi	す su	せ se	そ so
タ行	た ta	ち chi	つ tsu	て te	と to
ナ行	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no
ハ行	は ha	ひ hi	ふ fu	へ he	ほ ho
マ行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
ヤ行	や ya	—	ゆ yu	(イエ)ye	よ yo
ラ行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ行	わ wa	ゐ wi	—	ゑ we	を wo
ガ行	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
ザ行	ざ za	じ ji	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
ダ行	だ da	ぢ dji	づ dzu	で de	ど do
バ行	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
パ行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po

√ 開拗音 (齊口呼, 硬口蓋化音)

行 \ 段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
カ行 [kʲ]	きゃ kya	—	きゅ kyu	きえ kye	きよ kyo
サ行 [sʲ]	しゃ sha	—	しゅ shu	しえ she	しよ sho
タ行 [tsʲ]	ちゃ cha	—	ちゅ chu	ちえ che	ちよ cho
ナ行 [nʲ]	にゃ nya	—	にゅ nyu	にえ nye	によ nyo
ハ行 [xʲ]	ひゃ hya	—	ひゅ hyu	ひえ hye	ひよ hyo
マ行 [mʲ]	みゃ mya	—	みゅ myu	みえ mye	みよ myo
ラ行 [rʲ]	りゃ rya	—	りゅ ryu	りえ rye	りよ ryo
ガ行 [gʲ]	ぎゃ gya	—	ぎゅ gyu	ぎえ gye	ぎよ gyo
ザ行 [dzʲ/zʲ]	じゃ ja	—	じゅ ju	じえ je	じよ jo
ダ行 [dʒʲ/zʲ]	ぢゃ dja	—	ぢゅ dju	ぢえ dje	ぢよ djo
バ行 [bʲ]	びゃ bya	—	びゅ byu	びえ bye	びよ byo
パ行 [pʲ]	ぴゃ pya	—	ぴゅ pyu	ぴえ pye	ぴよ pyo

√ 合拗音 (合口呼, 円唇化音)

行 \ 段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
カ行 [k ^w]	くわ kwa	くゐ kwi	—	くゑ kwe	くを kwo
タ行 [t ^s]	つわ tsa	つい tsi	—	つえ tse	つお tso
ハ行 [h ^w]	ふわ hwa	ふる hwi	—	ふゑ hwe	ふを hwo
ファ行 [f]	ふあ fa	ふい fi	—	ふえ fe	ふお fo

√ 特殊音

行 \ 段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
サ行 [s]	—	スイ si	—	—	—
タ行 [t]	—	テイ ti	トウ tu	—	—
ナ行 [n]	—	ヌイ n"i	—	—	—
ダ行 [d]	—	デイ di	ドウ du	—	—
*バ行 [b/β/v]	ヴァ va	ヴィ vi	ヴ vu	ヴェ ve	ヴォ vo
ウヰ行 [w]	ウワ wwa	ウヰ wwi	—	ウヱ wwe	ウヰ wwo

n"i はフランス語の gni[ni] と ni[ni] (スペイン語やポルトガル語にも同じ発音あり) を書きわけるために導出されたヌイに対応してゐる。ニとヌイ日本語としては区別できない。

√ 特殊音の拗音

行 \ 段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
タ行 [tʃ]	テヤ tya	—	テユ tyu	テエ tye	テヨ tyo

V. 考察

根本的な問題として、ローマ字の子音と母音とで依って立つ基盤が異なっていることがある。子音は確かに英語風であるが、母音はイタリア語やドイツ語、スペイン語、ポルトガル語といった言語での運用をもとにしてゐる。たとへば、峯はローマ字では Mine と表記する。伊語独語西語葡語では日本語と同じやうに「ミネ」に近い発音 (あるひは「ミーネ」) になるが、英語では [main] といふ発音になり意味は地雷、鉱山である。伊達の Date も然り、[deit] となる。本当に英語風にしたいのなら、母音の表記も英語風に変へるべき (たとへば峰は Meeney,、伊達は Dertey) だが、英語風を気取る人はそこまで考へてはゐないことが多い。また、どう英語風につづつても英語内の方言により母音の発音が確定しないといふ重大な問題がある。あへて英語風の母音表記にしようとする、アイウエオは ah, ee, oo, ei (語尾は ey)/a, o のやうになるだらうか。

しかし、通用ヘボン式を実際に運用してゐる人が第一に求めてゐるのは英語としてちゃんと発音できることではなく、なんとなく英語らしい表記、英語風の表記である。学術的に批判に耐へるものではなく、日本人が日本語の延長線上で使つて、それなりに使へて、英語の中で使つてもそんなに違和感がない、といった、いろいろな妥協の産物である。さういうごちゃまぜで妥協の産物であるところに、生の言語のおもしろさがあり、通用ヘボン式の面目がある。

提案としては、既存の 50 音はヘボンの表に従ふ。英語風の母音表記なんて普及してゐない、そもそも確立してゐないわけで、通用として存在してゐない。

V.1 四ツ假名

四ツ假名といふものがある。ジヂズヅである。これらは江戸時代前期にジヂとズヅの発音が同じになったために、どう仮名で書くか混乱してゐる。復古假名遣(いはゆる歴史假名遣、とこしへ假名遣)では混乱する前の四ツ假名に従って書きわけてゐる。これによれば、ハハの一世代前がババといふハの濁音であるやうに、チチの一世代前は、ヂヂといふチチの濁音で表記され、語構成や日本語(あくまで古日本語だが現代語でも通じる部分も多い)の文法が明白になる面白さがある。一方、

現代仮名遣いは表音式と表明してをり、同音になってしまった四ツ假名は書きわけず、「ぢ」は「じ」、「づ」は「ず」として表記するのが建前ではある。しかし、机は「つくえ」なのに子供机は「こどもづくえ」になるといふのは奇態(けったい)である。現代仮名遣いでは折衷案的に一部の四ツ假名については書きわけてゐるため、通用ヘボン式でも書きわけたいといふ声がある。現今のヘボン式系統では、現代日本語のジヂ・ズヅの発音が融合してゐることから、ジヂ、ズヅを書きわけず、全てジズのローマ字 *ji, zu* で表記する。しかし、日本人の気持ちとしては、假名で「ち」「つ」で表記してゐる語が濁音化してしまつたものは、そのまま「ぢ」「づ」で表現したいといふ思ひがある。たとへば、先の子供机である。「こどもづくえ」はヘボン式ローマ字では *Kodomo Zukue* となる。「気疲れ」は *Kizukare* となり、假名の「きづかれ」と乖離する³望月(もちづき)氏は信濃の名家であるが、これもローマ字では *Mochizuki* となつてしまふ。これでは「すぎ」の濁音に見える。ご本人としては、「私は餅が好きなのではない」といひたいであらう。このやうに四ツ假名を一律サ行としてローマ字化されることに抵抗ある人も多い。これを解決するには、假名を翻字することである。

なほ、どこまで四ツ假名を復元するかは線引はむつかしい。いくところまで言つてしまへば、復古假名遣になるが、そこまで遡及する意図は通用ヘボン式にはない⁴。たとへば、「稲妻」は稲の妻といふ意味だから「いなづま」である。云はれみると、「へー」と思ふが、「いね」+「つま」といふ語構成がどの程度、通用ヘボン式の使用者の意識に登るかは不明である。稲妻は線引のギリギリ意識に登らない側にあるだらうか。なほ、これはヘボン式ローマ字では *Inazuma* となる。これを後述のやうに書きわけると、*Inadzuma* となる。

假名をローマ字で翻字するためには、四ツ假名に対応したローマ字を規定する必要がある。ヅについては簡単で、ズが *zu*、ツが *tsu* であるから、ヅは *dzu* がもっとも妥当である。実際、島津(しまづ)製作所は *Shimadzu* と表記してをり、「づ」を *dzu* と翻字することは通用ヘボン式でも既実践されてゐるといへる。

ただし、これには異論もある。ヘボン式を愛好する人々は英語風なのが好みなことが多いが、もし本当に英語風な綴りにしたいのであれば、「づ」は *dsu* であるべきである。なぜなら、英語には *dz* といふ子音の綴りはほとんどないが *ds* は多くあるからである (e.x. *Harrods*)。

ジヂについてはむつかしい。その理由は2つある。第一に、英語の *j* とヘボン式の *j* の音価に重大な違ひがある。そもそも英語では *j* の音価は [ʒ] ではなく、[dʒ] である。英語をもとにローマ

³ここらへんの語構成をどう感じるかは微妙で、現代仮名遣いでも、手綱は「手(た)」の「綱(つな)」なので「たづな」とするとなつてゐるが、絆は「キズナ」である。実は、絆は語構成として「気(き)」の「綱(つな)」だから「きづな」なのだが、現代仮名遣いでは「き」+「つな」といふ語構成は不透明になつてゐると解釈してゐるらしい。ここでは「絆」は気持ちの綱(リンク)といふよりも、傷名(きずな)のやうな言霊をもちかねない。

⁴ヘボン式派の傾向として発音を表記することを重く見るので、復古假名遣のやうに、発音を乖離した假名遣はあまり好まれない(そもそも知られてゐない)。

字にするのであればjiはジではなく、ヂが相応しい。ジをjiとするのはフランス語やポルトガル語である。ヘボン、ジとヂはまとめてjiとしてゐた。ヘボンは発音を転写するためにローマ字表記をつくった。つまり、翻字のためではなかったのだから、このやうな問題は生じなかった。もしヘボンの精神を尊重してjiをヂとして翻字するとしても困難に直面する。英語に [ʒ] (pleasure の s) を表記する適切な字母がないためである。これが第二の理由である。フランス語やロシア語のやうな [ʒ] がある言語の解説のために英語では zh といふ綴りが発明されてゐる。sh の有声音だから zh といふわけだ。これは合理的な方法で、一面の価値がある。しかし、通用ヘボン式およびほとんど全てのヘボン風規格では ji は既にジに割当てられてゐる。ジを zhi とする方法は合理的だが、通用の精神に反する。既存のやりかたに衝突しないためには、ジを ji とする既存の表記を尊重して、ヂは dji とするしかない。

この場合は、稀であるがジの促音(たとへばドッジボール)を表記する際に、問題が生じる。真正ヘボン式ではジは [dʒ] の子音と考へて、d を重子音 dd として表記する。j の中に d が含まれてゐるので「ッジ」は dji となる。たとへばドッジは dodji となる。一見すると促音に見えないが、真正ヘボン式として正しい。ここで、ヂと dji と通用ヘボン式を拡張した場合、ヂの撥音(たとへば、ロッヂ)は ddji(ロッヂは roddji) でいひが、ジの撥音、ドッジは dojji といふやうにしなければならない。なほ、通用ヘボン式ではドッジは dojji と綴られることが多い。ヂを dji とする方策は、少なくとも通用ヘボン式内では衝突がない。

なほ、四ツ假名を発音で書きわけるのは無理である。第一、四ツ假名は假名遣として書きわけてゐるだけであつて発音には反映されてゐない。望月の発音と餅好き(もちずき)の発音は全く同一である。日本語では語頭の四ツ假名は [dʒ] と [dʒ] で発音されてをり、語中は全て [ʒ] と [ʒ] となり傾向がある。これはもともとの假名遣によらない。カナカナを表音的に用ゐると語頭ではヂヅとなり、語中ではジズとなる。自信(じしん)はヂシン、鼻血(はなぢ)はハナジとなる。このやうに假名遣は—現代假名遣いであつても—発音を表記したものではない。こころへの発音の相異は、フランス語やロシア語など [dʒ] と [ʒ] を厳密に区別する言語の話者によれば明解に指摘できるが、明解に区別しないことが言語的特性の日本語話者には判然としない。語中と語頭で発音が違ふのは、なにも四ツ假名だけではない。バ行も語頭では [b] の破裂音だが、語中では [β] となる。これらの相異は、発音しやすいといふ生理的条件の他に、語頭と語中を発音しわけることによつて、無意識のレベルで語句認識を容易にするといふメリットがある。最後に、tsu と書いても英語話者には「ツ(あるいはその類似音)」とは発音できないことがほとんどであることを書き添へておく。

まだ四ツ假名の辨別があつた時代、ポルトガル人宣教師たち(正確には、地中海世界のいろいろな人達がゐたが、公用語としてポルトガル語を使用してゐた)は、ジとヂを ji と gi、ズとヅを zu と dzu/zzu を使つて書きわけてゐた。ポルトガル語では ji と gi、zu と dzu は同音であるのに、である。このやうにローマ字は当該言語にあはせて、弾力的な運用をすべきであると思はれる。

V. 2 長音の表記

ローマ字の長音表記はゆれが多い。長音の表記は、正統なヘボン式ではマクロン「 $\bar{\quad}$ 」で示す。たとへば、十合「そごう」を Sogō と綴る。しかし、マクロンは ASCII(いはゆる英字)で表記できない面倒な記号である。端的には、キーボードトップの字だけ見て打つことができないので、

非英語の外国語フリークな人か組版フリークな人しかできない⁵。マクロンが使ひにくいこともあって、ヘボン式系統の一派「標準式」では、マクロンのかわりに、山形/ハット/サーカムフレックス/シルコンフレックス/circonflexe と呼称される「^」で示す。十合の例でいへば、Sogô となる。山形はフランス語で使はれてゐることもあって、古くからタイプライターで出せたこともあり、ローマ字運動のさかんだった明治大正期の代表的な長音表記記号であった。山形を長音記号として採用したのは標準式だけでなく、ヘボン式以外の日本式もさうであるし、訓令式、ISO3602 式でもさうである。現在でも、山形は少なくともマクロンよりは出しやすく、HTML では比較的簡単に表記できるが、â をâ、Sogô であれば Sogô といった面倒くさい綴り方をしなければいけない。テキストとしては文字コードを拡張ラテンといふ日本語でないものにしないといけない⁶ため、表記フリークの人以外は普及してゐない。こちら ASCII ではないため使へない場面(たとへばメールアドレスには使へない)が多いし⁷、使へたとしても書くのが面倒くさいし文字化けのおそれがあることから、避ける人、もともと知らない人が多い。ASCII で書けることが望まれてゐるのである⁸。

長音記号は ASCII で書けないし、英字新聞では長音記号を表記しないこともあって、無視したい人は無視してゐるし、そもそも長音記号を知らない人も多いが、なんらかの形で長音を示したいといふ人も多い。ひとつの方法は翻字式で、「伊藤」「当山」といふ名前を仮名どほりに Itou, Touyama⁹ と綴るのが翻字式である。英字新聞風に長音記号を無視すれば、Ito, Toyama となる。これだと「糸」「富山」と区別がつかないから嫌に思ふわけである。また、また、h を加へる人も多い。大前を Omae でなく Ohmae と綴るのがそれだ。確かに、Omae と書くと「お前」と呼ばれさうで嫌なので Ohmae としてゐるのだらう。しかし、Sogo (「そごう」) のつもりが齟齬と読まれる危険もあり。「総合警備」のつもりが齟齬警備?!) や Koban (交番ではなく小判と読まれる危険あり) のやうに当事者が気にしてゐない場合もある。

長音を表記するのに、母音連続(ダブリング)で表現する方法がある。訓令式でも山形(ハット)が使へない場合は、母音を重ねて示すとある。たとへば、十合は Sogoo, 総合は Soogoo, 伊藤は Itoo, 大前は Oomae と綴ることになってゐる。しかし、ほとんどの人が実行しない。中には知らないで実行しない人もゐるだらうが、知ってゐても実行しない人があるのは、oo の連鎖は、英語で「ウ」(spoon) と読まれるためか、なんとなくカッコ悪いからかもしれない。したがって通用ヘボン式では、長音を母音のダブリングで示すことはないといつてよい。

V. 2.1 長音を翻字で表記する方法

上の伊藤を Itou とするやうに、ただ仮名で書くやうに翻字する方法がある。通用ヘボン式の長音表記では、この翻字と-h 式が双璧である。もし規範として、通用ヘボン式を整備するとすれば翻字を強く推奨したい。理由は後述し、ここでは記述文法の立場で解説を加へる。

この方法の欠点は、ou といふ綴は、英語では [u](would) とか [u:](coupon), [ʌ] (double) とか [au](house) とオの長音っぽくない語が多いことである。もつとも、[o:]thought のやうにオーに

⁵非英語の外国語フリークならばできるといふわけではない。マクロンを使ふのはラテン語、ギリシャ語、古英語、サンスクリット、パーリ語といった古典語のほかに、ハワイ語がある

⁶かかる不便を廃し混ぜて使へるやうにしたのが unicode。ただし、unicode の運用も混乱してをり、ややこしい。

⁷人が機械を使ふのではなく機械に人が使はれてゐるわけであるが...

⁸拙文『日本式ローマ字翻字の推薦』中の「ASCII の呪ひ/ASCII の呪い」参照

⁹復古仮名遣では「当」は「たう」なので Tauyama となる。

近く読まれる語もあるにはある。また、講師/仔牛をどちらも Koushi と綴るやうに形態素の区切が不明瞭になる欠点がある。講師は Kou-shi であり、仔牛は Ko-ushi であるが、翻字の場合、もとの仮名が「こうし」のため区別できなくなる。人名で云へば、伊藤は Itou と綴り、イトーと発音するのに、井内は Inouchi と綴るが、イノーチとは発音せず、イノ・ウチと発音しなければならない。このため、綴を見ただけで発音を知ることができなくなる。もっとも、ローマ字は発音を表記するものではない(語を表記するもの)ので、たいした問題ではないといふこともできる。この問題は翻字一般につきものの問題であり、仮名連鎖を翻字した場合には仮名連鎖のかかえてある曖昧さがローマ字に露見したといふことである。

V. 2.2 長音をマクロンやハット以外で表記する方法

最初に、長音を母音+h で表記する方法 (Satoh, Ohno) について吟味する。これは英語風と思はれがちであるが、実際では、英語では母音+h は短音と解釈されやすい。たとへば、Sarah(邦名サラ)は音節で見ると Sar-ah と分節され、[se@r-@](無理に仮名書きすればセアラ。サラーやセラーではない)となる。母音+h で長音を示すのはドイツ語やイタリア語に見られる。かういふ風になつた原理が、まぜこぜになつてゐるのが通用ヘボン式の醍醐味である。

この方法は長音の次に母音やハ行が来るとどこで音節が切れるのかわからなくなる欠点がある。たとへば、大矢と Ohya と綴ると、「おひゃ？」と読めてしまふ。大原は Ohhara になるが、これでは「風とともに」のオツハラさんになつてしまふ。このやうな場合には Oh'ya/Oh-ya や Oh-hara/Oh'hara のやうに分綴する必要が生じるが、多くの大原さんや大矢さんたちは気にかけてゐないやうである。

長音を「-」(ハイフン)で区切る方法もある。たとへば、Yu-ji である。おそらく、棒引き(イチローの「一」)がハイフンに似てゐるためと思はれる。これは英語を意識しない文脈でよく使はれてをり、英語で長音を示す記号ではない。ただし、後述するやうに分綴しておけば、そこで音節を切って読んでくれる可能性(分節)が高くなるので、ハイフンの前の音節が開音節化するといふメリットがある¹⁰。なぜ分節がメリットになるかといふと、閉音節を持つ言語(印欧語を含む)の多くでは、開音節は長音になることが多いためである。ハイフンで切るのは自立語の連接と紛らはしくなる。また、語末にハイフンを付けることはできないから、語末の長音と短音の区別には役立たない。たとへばイチローは Ichiro- となるかもしれないが、これでは、ハイフンの次に何か語が来ることになつてしまひ不都合である。が、Ichiro とすると一路と区別できない。後述するやうにハイフンは自立語の連接のためにとつておきたいので、規範としては推薦できない。

また、アポストロフィで長音を表記する人もゐる。たとへば、Yu'suke Kubo 氏はアポストロフィで長音を明示してをられるやうだ。アポストロフィで分綴しておけば、そこで音節の区切になる。アポストロフィの前が開音節になる。前述のやうに開音節は印欧語では基本的に長音っぽく聞こえることが多いので、その意味では親和性が高く、通用ヘボン式の愛好者の志向とも合致しさうである。英語では a の開音節は [ei], i の開音節は [ai], u の開音節は [ju:], e の開音節は [i:], o の開音節は [ou] と o 以外は長音っぽくならない。長音表記で問題になる長音は o と u だけだから、多少は有効である。日本語のアの長音はほとんどなく、あつても「オカーサン」のやうに

¹⁰正確に書くとは開音節化ではなく開音節の明示である。日本語では撥音と促音を含む音節以外は全て開音節なので、もともと開音節なものを開音節化するといふ表現は当らない。

okaasan と a の重字で綴られるので出番はない。同様にイの長音はほとんどなく、「オニーサン」「新潟」のやうに長音っぽく見えるものでも oniisan, niigata と母音のダブリングで表記する。また、エの長音は假名遣でも「えい」と表記し、ローマ字でも ei と表記(たとへば「経営」は keiei)することに異存はない。外来語としては「メール」のやうに「エー」と表記する例がある。これについては、アポストフィよりも h で表記するほうが望ましいかもしれない。そもそも、mail と英語で綴り得る語をわざわざ通用ヘボン式でローマ字表記しなければいけない必然性がないので、これについては単純に、翻字の際には h で、それ以外は原綴を適用するとすれば済む。

V. 2.3 補足. なぜ長音が多いのか

人名地名などの固有名詞の場合、ほとんどの長音は和語にあるのではなくて、漢字音である。たとへば漢字音で室町時代以前くらゐまで、カウ(耕幸康高)、カフ(合甲)、クウ(皇光黄広)、コウ(興公厚)と別々の発音読まれてゐた漢字が、近世になってコーに収斂してしまった¹¹。もともとは中国語として二重母音やの母音+子音(音節末)で読まれてゐた漢字は日本語では発音できないので、日本語で発音できるやうに二重母音二モーラに分解された¹²。

その後、二重母音は融合して単母音の長音に変化した。母音+子音(音節末)の例の一つに京がある。京は kyang のやうに読まれてゐた。ng が音節末の子音である。当時の京の発音は現在の「犬がキャンキャン吠える」の最初のキャンと同じである。それがキャウになり、キョウになりキョーになった。もともとは日本語には長音がなかったわけである。また、漢字音ももともと長音ではなかったが、二重母音や母音+子音(音節末)が融合・収斂した結果、大量に長音が発生した。

このやうな音韻変化史を鑑みると、発音は易きに流れれるといふ命題¹³が思ひつくかもしれないが、さうとばかりは云へない。もし、発音し易いなら発音しやすい方に流れるといふ命題が正しいならば、しゃべらないのが一番易しいわけで、全ての言語はどんどん、「アー」とか「ウー」とか遂には無声になっていくはずである¹⁴が、そんなことはなつてゐない。発音しやすくて意味が通じないのであれば意味がないわけで、この音韻変化は、発音が収斂しても実質問題、不便はなかった、あるいはむしろ、発音が収斂することで意志疎通や社会生活になんらかのメリットがあつたと考へるべきである。たとへば発音が収斂することで、空気を読む能力のあるなしをチェックできるなどである(空気を読む能力の高い者は収斂した発音でも理解でき、空気を読めない者はコミュニケーションから排除される)。

V. 2.4 補足. 長音短音の対立は絶対か

長音か短音かで意味が違ふ言葉も多いが、さう話は簡単ではない。たとへば、「人形」はニンギョーのやうに語末を長音で発音する。これをニンギョと発音すれば、「人魚」になって「人形」

¹¹厳密な時期的な問題については未決。ここでは暫定的に知られてゐる時代を示してゐる。

¹²現在でも、発音できるやうに分解する調整は健在である。英語の hat という 1 音節語をハットと 3 モーラに分解してゐるし、sign という二重母音を含む 1 音節語を、サインと 3 モーラに分解してゐる。これらは日本語の開音節的特徴にあはせて、開音節的になるやうに調整されたためである。

¹³ついでに、「日本語は時代を追ふごとに崩れていく」といふ嘆き

¹⁴からころも慣れ親しんだ夫婦は、それで無声なのかもしれない。「アレ」「ソレ」。あるいは目線のみで会話する。

にはならない。しかし、「お人形さん」といふ語は、一般には「オニンギョサン」と短音で発音する。「お人魚さん」といふ語とはアクセントで区別してゐる。このやうに、長音と短音が明確に区別できるものではない語もあって、長短を区別することの意義が若干ゆらくごともある。また、歌謡ではしばしば、母音の長短は音符の長短にあはせて伸縮される。

長短とは異なるが、松浦や真岡はそれぞれ「まつうら」「もおか」と假名では綴るが、発音は、「マツーラ」だったり「マツウラ」だったり、「モオカ」だったり「モーカ」してゐて一定してゐない。同じ母音の連呼で発音しても長音として発音してもたいてい通じる。しかも、その発音が同音の連呼なのか、長音なのか、日本語話者は区別した上でのことである。

このやうに長短は絶対なものではないため、長音を表記しない方針にも一定の妥当性がある。

V. 3 撥音「ん」

撥音「ん」の表記には二種類の課題がある。一つは、直後の音により撥音の解剖学的な音・音声学的な音が異なることをどう表記するか、もう一つは、直後に母音が来た時に、結合してナ行になってしまはしないやうにするにはどう表記すべきかといふ課題である。

V. 3.1 直後の音による「ン」の多様化

真正ヘボン式では「ン」は唇音 (pbm) の前では m として、それ以外の音の前では n として表記することになってゐる。ヘボン風規格では、いろいろで、外務省旅券用や鐵道省駅名用のやうに唇音の前で m にするものもあれば国交省道路標識用のやうにいつでも n のものもある。

通用ヘボン式ではどうかといふと、圧倒的に「ん」は n で表記してゐるものが多い。日本語話者の多くに、ある子音が唇音だとか歯音だとかといふ意識はない。だから、唇音かどうかで「ん」を書きわけるのは日本語話者の直感的な感覚には合致しない。日本語話者にとって「ん」は常に同じ音である。言語学的には、「ん」は音素 /N/ で示されるある定まった音素を示す。この音素は [m] (例. サンパチ式) であつたり [n] (例. サンハチ式) であつたり、[ng] (例. 三階) だつたり、時に [ã] (例. 三一書房「サンイチ…」), [ĩ] (例. 慎一「シンイチ」), [ũ] (例. 俊一「シュンイチ」), [ẽ] (例. 仙一「センイチ」), [õ] (例. 婚姻「コンイン」; 以上、母音の前の「ん」鼻母音となる) であつたりする。語末の「ん」は口蓋垂音 [N] となる。[N] は [n] と違って口が閉じない。これらの本当は違ふ音を日本語話者は全て同じ「ン」として体得してゐるわけである。

もともと英語話者も唇音だから「ん」を m にしようとかさういふ理知的な考へで綴るのではない。唇音の前の「ん」は m に聞こえるから、さう綴るだけである。日本語話者にとっては「ん」は常に「ン」としか聞こえない。通用ヘボン式の性格を考へると、規範としても「ん」は常に n とすることを追認するべきと考へられる。

補足: 「ん」と n とする表記は、もともとは日本式ローマ字綴りのものだが、なぜかヘボン風ローマ字表記に取り入れられた。おそらく、日本人の直観として、「ん」は「ん」だからであらう。日本式といふ綴り方は今日では広く使はれてゐないが、日本式の眼目の一つである音素に従った表記法は、通用ヘボン式の世にあつても、少なくとも「ん」と n とする表記の中に生きつづけるであらう。これは重要なシストで、どんなに日本式ローマ字が忘れられた世になつても、誰かが「ん」と n とする表記を掘り下げれば日本式ローマ字に到達するからである。

V. 3.2 後続の母音との結合でナ行になる問題

「ん」の後に母音、半母音が来る時は、語句をハイフン「-」かアポストロフィ「'」で区切ることが必要である。たとへばケンイチは、真正ヘボン式では Ken-ichi と表記するやうに定められてゐる。標準式では Ken'ichi と綴られる。

通用ヘボン式では気にしないことも多い。が、例外もある。慎一は、Shinichi と区切らずに使ふと「死に地」となつてかなり縁起が悪い(日本人的には)。婚約は Konyaku となり、菟蓐(こんにやく)みたいになる。信用が屎尿、善意が銭と日本語的には甚だ問題なので区切りたいといふ希望も多い。ここでは、これを規範的に検討する。

真正ヘボン式では、区切りにハイフンを用ゐるが、英語ではハイフンは形態素の区切りといふよりはむしろ、自立した語の区切り・自立した語の接続¹⁵に使はれてゐる。この時点ではどちらも正当性がある。仮に、英文の中で使ふことを考えると、ハイフンを使って Shin-ichi とした場合、Shin とか ichi といふ自立語があるかのやうな錯覚を与へさうだし、接続した語句、たとへば、備中新市(さういふ地名があるかどうかは知らない)といふ地名があつた場合、Bitchu-Shin-ichi となつて、語句の切れ目が非常にわかりにくくなる。アポストロフィにすれば、Bitchu-Shin'ichi と綺麗に語の接続と形態素の区切が明記できる。また、ここでは備中を Bitchu と、母音の長短は書きわけてゐないが、前述のアポストロフィで開音節を明示する方法を用ゐると Bitchu'-Shin'ichi と長音も撥音も接続もうまく表現できる。長音と撥音の区切は混同のおそれはない。なぜなら、長音にしたい音節は母音終はり(開音節)であり、撥音は n で終はる子音終はり(閉音節)であるからである。このやうに考えると「'」で区切るほうが望ましい。前述のとほり、これは規範の提案であつて、通用ヘボン式ローマ字現象の記述ではない。

なほ、家電の三洋は Sanyo とサニョ(左女?)、サニョー(左尿?)といふ変な綴りである。Junichiro と綴つてゐる純一郎氏も多い(ジュニチロー?)。かういふ表記が気になるかならないかは個人差がある。

V. 4 「ゐ」「ゑ」

「ゐ」「ゑ」は現代仮名遣いでは用ゐないが、歴史的仮名遣や江戸時代までの「通用」仮名遣い¹⁶では用ゐられてゐた。「ゐ」「ゑ」は、ワ行のイ段、ウ段だから、それぞれ wi, we と表記すればよい。発音を表記するとすれば、「ゐ」も「ゑ」も必要ないが、翻字のためにこの表記は必要である。筆者の祖母の名前は「きみゑ」なので、この方式を導入すれば、めでたく表記できる。また、この方式は素直であるために、発音の問題(wi と書くがウィと発音するわけではない)を除くと既存のシステムと衝突することはまったくない。

¹⁵両者は同じこと。切った方から見るか、くっつけた側から見るか視点の違い。

¹⁶江戸時代まで一般には歴史的仮名遣と同じ 48 文字(+ 変体仮名)の仮名を用ゐていたが、正書法といへるものではなく個人差が大きく混乱してゐた(がそれでも通じた)。

V.5 拗音. 特に「ジャ」行

拗音では特にジャ行の間違ひ(規格からの逸脱)が目立つ。しばしば例にあげられるのは新庄といふ人名・地名である¹⁷。規格としてのヘボン式はいづれも Shinjo あるいは Shinjō, Shinjō と綴るが、通用ヘボン式では, Shinjyo と綴られることがある。これが「あり得ない」表記であることは多数の方の指摘がある。筆者もまったく同意見であるが、ここで問題提起したいのは、どうして、そのやうな「あり得ない」表記が通用するのか、である。

ジャ行はしばしば間違へて表記される一方でチャ行は cya とか chya と綴られることはほとんどない。あるとすれば tya である(あったとしてもきはめて稀であらう)。また、シャ行は sha とか sya と綴られることが多い。なほ, sya は日本式の表記であり、ヘボン式ではない。jisyo といふ折衷的な表記があることから、書いた人はヘボン式のつもりで書いてみると予想される。筆者は Izu-Oshima Syuhen-kaiiki(伊豆大島周辺海域)といふローマ字綴を見たことがある。大島のシが shi なのに、周辺のシュが syu となっているのは奇異な感じがするが、これが現象としての通用ヘボン式の実態である。

このことは日本語話者は拗音を y と付加したものと無意識に認識してゐることが予想できる。これを全行について整然と適用すれば日本式になってしまふのであるが、通用ヘボン式ユーザーの(無意識の)判断は、日本式を単純に支持してゐない。チシツフジの綴り方は chi, shi, tsu, fu, ji となり、ほとんど揺れがない。ヘボン式が英語風でカッコいい¹⁸といふ意識もあるだらうが、音意識の上でこれらの音はそれぞれの行の中で別種と考へられてゐるのかもしれない。拗音で間違へてゐるところを見ると、拗音の音構成は『直音の子音+y+母音』と理解されてゐるのであらう。これは、カナで拗音と「ャ」と書くことに牽きづられてゐるのかもしれない(想像)。加へていふならばワープロでの日本語入力も一因であらう。ワープロではチは ti, シは si, ツは tu, 拗音は直音+y+母音でと日本式の入力方法が多用される。打ちやすいし、語感や音構成にあつてゐるためだらう(想像)。ただし、ジはほとんど ji と打たれて入力されることが多い。z はキーボードの端にあり打ちにくい一方で j はホームポジションにあり打ちやすいことが大きな理由と考へられる¹⁹。このことからジャ行はジの子音 j +y+母音と思はれたのかもしれない。

同じ硬口蓋化音で、別の綴方としてもいい音に「ニ」がある。厳密には舌のつきが違ふ²⁰が、日本語の「ニ」はフランス語の Champagne やイタリア語の gn やスペイン語の el niño の ñ, ポルトガル語の vinho(ワイン)などと似てゐる。音声は心象なので異同の程度を議論することはむづかしいが、ニと gni はフ [Φw] を fu と表記するくらゐには似てゐる。フラ語伊語西語葡語では [n] と [ɲ] は区別されて、表記も異なる。もし、音のある程度の相異でもって書きわけのなら、ニもフラ語伊語風に gni とか葡語風に nhi とか、古英語風に cni とか kni と書きわけてもいい筈であるが、通用ヘボン式でそのやうな現象は見られない。不統一不徹底なのが通用ヘボン式のおもしろさなのだといつてしまへばそれまでであるが、話者の原則として、できるだけ拗音を『直音の子音+y+母音』で表記したいといふ原則が見てとれる。また、cya, chya があまりないことから、頭子音は1字が望ましく、2字となる chi は間違へないが、1字の ji は間違へやすいのかもしれない。Japan といふ呼称も影響してゐるかもしれない。sya は幸か不幸か日本式で認定された

¹⁷他にも Jyoro(如雨露)といふ綴りを見聞したことがある。

¹⁸厳密にはヘボン式は英語風だとは云へないのだが... ここでは話者の意識を問題にしてゐる

¹⁹ここでも機械に使はれてゐる実態がある

²⁰厳密に云へばシヤチの子音も英語の sh や ch とは解剖学的に違ふ音だが。

綴り方であり、また、ワープロでの日本語入力でも使用されてゐることもあって間違へやすいの
だろう²¹。

V. 6 分かち書き・分綴の困難さ

ローマ字表記では、しばしばチューバのテュをどう綴るかといった特殊音の表記法がとり沙汰
されるが、真実、困難なのはそんなことではなくて、分綴や分かち書きである。

ある地図の地名のローマ字表記に次のやうなものがあつた。

紀ノ川：Ki-no-Kawa, 天ノ橋立：Amo-no-Hashidate, 仙ノ倉山：Sen-no-Kura Yama,
徳之島：Tokuno Shima, 江ノ島：E-no-Shima, 潮岬：Shiono Misaki, 日御崎：Hinomi
Saki, 茅ヶ崎：Chigasaki, 霞ヶ浦：Kasumi-ga-Ura

助詞の「の」や「ヶ」を分綴するのかわしないのかが不統一である。また「島」をわかち書きす
るのかわしないのかも不統一である。

また、別の地図には、かうある。

経ヶ岳：Kyōgatake, 針ノ木岳：Harinoki Dake, 赤岳：Akadake, 沖ノ鳥島：Okinotori
Shima, 江ノ島：Enoshima, 犬吠崎：Inubō Saki, 石廊崎：Irō Zaki, 日御崎：Hinomisaki,
茅ヶ崎：Chigasaki,

「の」「ヶ」は分けなことで統一されてゐるが、「岳」や「島」,「崎」をわかち書きするのかわ
しないのかは不統一である。

分かち書きや分綴は語構成が透明であれば簡単であるが、語構成が透明かどうかはその人の
日本語に対する見識(誤解も含む)に依存するため一概には云へない。

たとへば、江ノ島はおそらく全ての日本語話者に対して透明である。キノコは語構成は「木ノ
子」であり、知つてゐる人は知つてゐるが、知らない人も多いだらう。しかし、「木ノ子」とい
ふ語構成解釈を聞けば一見して納得できる。これを半透明といふことにする(前述の絆もこれく
らゐの透明度と考へられる)。まなこ(眼)は、「目の子」で「の」の母音が変音したと解釈される
が、この語構成は一見して納得できるものではない。もはや不透明になってしまったと云へる。
同様に不透明になってしまったものに源(水な元)や掌(手な心)がある。これらは母音交替を核
にしてゐるが、現在の日本語では母音交替はほとんど意識されないためである。

母音が変化してゐなくても不透明な語はある。「いのち」は、息の「い」、助詞の「の」、靈力の
「ち」といふ語構成になるが、息の「い」や靈力の「ち」は古語で現代語で使はれないため不透明
になってしまった。息の「い」は多少は半透明かもしれない。「ち」は「いかづち」、「をろち」、
「みづち」、「かぐつち」などで用例があるものだが、現代人にとっては不透明である。「いかづち」
は雷のことで、「いか」めしい力の意である。「つ」は沖つ白波と同じで「の」の意。「みづち」は蛟
(蛇)のことで、原義は水の靈力の意である。「をろち」は大蛇のことで、岡(山)の「を」+上代
の助詞「ろ」(意味は「の」+靈力の「ち」といふ語構成で、山の靈力といった原義になる。「か
ぐつち」は日本神話に出てくる火の神で、イザナミは「かぐつち」を産んだがために焼死してし

²¹筆者はちなみにzとjのキーを入れ換へてゐる。

まった。語構成は「かが」やく+「つ」(「の」)+霊力の「ち」で、火の神に相応しい名前である。が、これらの語構成をどれくらゐの人が自分の言葉として身につけてみるだらうか。

語構成意識の違いが分綴や分かち書きになって表れてしまふ。ラテン文字を使ふ諸国民からすれば、分綴や分かち書きが違へば、違ふ言葉になる。そのため、同じ地名でも、分綴や分かち書きが違ふために違ふ地名になってしまふ。Ki-no-KawaとKino-KawaとKinokawaは違ふ地名なのだ。地名など公共性が高いものでは異綴ができて混乱するとふ問題もある。通用ヘボン式では、それが露骨に反映されてをり、分綴や分かち書きは、書く人の気持ちそのままである。

それでも、日本語話者同士ではかなり変なローマ字綴(たとへば日本式とヘボン式のチャンポン)でも意思疎通できてしまふ。異綴が多いのは、異体字が多いのと同様してゐるかもしれない。日本では異体字が多いがそれでも意思疎通にほとんど支障がない。同様に変なローマ字綴でも日本人同士では意思疎通に支障がなく、それがゆゑに変なローマ字綴がとんどん拡大する、といふ図式が成立するかもしれない。ただし、外国には通用しない。異綴はそのまま異物を指す。といいながら、アルファベットの本場のアメリカでは、異綴でも認められる例がある。たとへばWilliamの愛称がBillで綴り(と発音)は異なるが、同じ名前とされてゐる。これは非公式に同じなだけではなくて、公式にも同じ人物を指す(例、ビル・クリントン)。このやうに異綴でも同物であると慣習的に認められてゐる例も多い。また、非アルファベット文化圏で、ローマ字表記がいろいろあって混乱してゐるのは日本だけではない。

日本語を仮名連鎖とするならば、分綴も分かち書きもしないローマ字綴がもっとも日本語らしい表記法であるはずであるが、さうなると、たとへば東松山はHigashimatsuyamaとなり、著しく長く、日本人にも読みにくい、しかも閉音節言語の欧米人には更に発音しにくい綴となつてしまふ。つまり、音節の区切がどこにあるのがわからないし、音節数が多すぎる。これに対する明確な解答はないし、通用ヘボン式でも混迷の中にある。通用ヘボン式の読み方としては、いかなる綴りであっても、適当なところで切つてみる、また、分綴してゐてもそれが固定の表記と考へずに分綴箇所を繋げたり、別の場所で切つたりして、語構成を自分でさがすべし、といふアドバイスが最善のものであらう。つまり、物事の混乱以上に、自分の理解を拓げるしかないのである。

VI. おはりに

筆者自身は日本式ローマ字の翻字を推薦してゐるが、自説とは別に現象を深く理解するために、ヘボン風のローマ字についても考察を試みた。

本稿ではなぜ(通用)ヘボン式が流行するのかについて考察したかったが、そこまで到達できなかった。なんとなく英語っぽい(すこし調べれば全然英語と違ふことがわかる筈だが)といったアメリカ志向もあるかもしれないが、結局、どうでもよいと思つてゐるからではないか、といふ印象をもつてゐる。これは今後の課題である。

VII. 文献

辻野 匠 (2007) アルファベットと発音。100+頁。オンラインドキュメント。

TuZino, T (2007) Transcription and Transliteration for the Cyrillic. 1p. online document.

辻野 匠 (2007) 勝手なギリシャ文字翻字. 4頁. オンラインドキュメント.

辻野 匠 (2008) 日本式ローマ字翻字の推薦. オンラインドキュメント.

VIII. 代書法

IPA	代書	音名 (無=無声, 有=有声)	説明
u	ω/M	平唇後舌狭母音	標準的な「ウ」の母音.
ə	@	中央中舌母音	Schwa, いはゆる曖昧母音.
ŋ	g̃/ñg	軟口蓋歯茎音	いはゆるガ行鼻濁音. song の ng.
ɳ	N	口蓋垂鼻音	語末のン. 一休さんの「ん」.
ʃ	š/S	硬口蓋歯茎摩擦音 (無)	esh. 英語 sheet の sh. 仏語 châteaux の ch
ç	s ^c /ṣ	歯茎硬口蓋摩擦音 (無)	curly-tail C. 標準的な「シ」の子音
θ	θ	歯摩擦音 (無)	英語 thank の th.
tʃ	t̃š/č/t̃S	硬口蓋歯茎破擦音 (無)	[t̃s] の硬口蓋化音 英語 church の ch
tʃ	t̃s ^c /t̃ṣ	歯茎硬口蓋破擦音 (無)	標準的な「チ」の子音.
ʒ	ž/Z	硬口蓋歯茎摩擦音 (有)	yogh. 英語 pleasure の s. 仏語 Jean の j.
ʒ	z ^c /ẓ	歯茎硬口蓋摩擦音 (有)	curly-tail Z. 標準的な語中の「ジ」の子音 (例「工事」).
dʒ	d̃ž/d̃Z	硬口蓋歯茎破擦音 (有)	[d̃z] の硬口蓋化音. 英語 John の j
dʒ	d̃z ^c /d̃ẓ	歯茎硬口蓋破擦音 (有)	標準的な語頭の「ジ」の子音 (「自信」の「ジ」).
ɲ	ñ	歯茎硬口蓋鼻音	標準的な「ニ」の子音.
ç	š/ç/C	硬口蓋摩擦音 (有)	標準的な「ヒ」の子音.
ɸ	Φ	両唇摩擦音 (無)	標準的な「フ」の子音.
β	β/B	両唇摩擦音 (有)	語中のバ行の子音. サバのバ.
r	r	歯茎弾き音	標準的なラ行の子音. 米語 water の t, tanner の n.